
バカとエクソシストと召喚獣《イノセンス》

きこりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとエクソシストと召喚獣^{イノセンス}

【Nコード】

N7649Z

【作者名】

きこりん

【あらすじ】

「君たち、学校に行ってみないかい？丁度良いところがあるんだ」コムイの計らいで、初めて学校に通うことになったアレン、神田、ラビ、リナリー。しかし彼らが通う学校 文月学園 は、ちよつと変わった学校だった。 バカテスの世界にDグレティーンズが参戦！そしてコムイの計らい（策略）はこれだけではなかつた！？ギャグコメディ風味、バカとエクソシストと召喚獣^{イノセンス}！！

【第一話】不安な呼び出し〜アレン・ウォーカー〜（前書き）

にじファンへは初めての投稿!! 3
はじめまして きこりん です。

今回はクロスオーバー作品、バカとエクソシストと召喚獣^{イノセンス}を
のんびりですが進めて行こうと思います

拙い文ですが、よかつたら読んで行ってください> (´) (´) (´) <

【第一話】不安な呼び出し〜アレン・ウォーカー〜

ある晴れ晴れとした夏の日の昼下がりに
白髪の少年アレン・ウォーカーは、いつも一緒にいるティムキャン
ピーと共に室長室へ続く薄暗い廊下を歩いていた

…いかにも嫌そうに

それと言うのも今から20分ほど前

食堂で山盛りの食事を目の前にして至福の時を過ごしていたアレン
のもとに、任務ではない呼び出しが伝えられたことによるものだっ
た。

「アレン、室長が呼んでいたぞ。食事が終わってからで良い
から来いよさ。」

「任務じゃないんですか？」

「どうやら違うらしい。俺も詳しいこと聞いてないからなあ」

リーバー班長から伝えられたそれは、アレンに苦い過去を思い出さ
せる。

むろん、たびたび教団を壊滅させそうになる問題児（？）、コムイ
がらみの事件である。

伝えに来たリーバーも、眉を八の字にして「まったく室長は…」と
ため息をつきそうな雰囲気だった。

いや、言っていたかもしれない

そんな経緯で、しっかりと昼食を食べ終えたアレンは室長室へ向かっていた。

重そうな、しかしいつもあけ慣れている室長室の扉の前に立ち「いや、待てよ」と考えなおす。

ここまでマイナスなことばかり考えてきたが、曲りなりにもコムイはここ黒の教団をまとめる人間（のはず）だ。もしかしたらこの呼び出しも、僕とリーダー班長の予想に反して、何か（危険なことじゃない）重要なことかもしれない。

そう思い、「大丈夫だよ」と頭上で羽ばたくティムキャンピーに声をかけたアレンは

室長室の扉をゆっくりと押し開けた。

【第一話】不安な呼び出し〜アレン・ウォーカー〜（後書き）

きこりん「お初にお目にかかります、きこりんです」

アレン「バカとエクソシストと召喚獣^{イノセンス}、始めましたね」

きこりん「長くて言いづらいから『バカエク』でいいよ」

アレン「なんだかその響き、府に落ちないのですが…まあいいや。」

きこりん（良いんだ…^^;）

アレン「ところで、なんで僕が後書きにまで出てるんです？」

きこりん「それはね…楽しそうだから」

アレン「正直に言ってください。どなたかを真似てるでしょう？」

きこりん「う…だってリスペクトしてる色々な方々の小説見て、

やりたくなっただよお」

アレン「イミテート」

きこりん「いえ、リスペクトです。」

アレン「まあ、いいです。そういうことしておきましょう」

きこりん「さすがアレンさん。お心が広い」

アレン「紳士ですから」

きこりん（自分で言うか…）

アレン「言わせてるのはあなたでしよう？」

きこりん「？」「めんなさい」

アレン「というところで、こんなg d g dな作者への質問、意見等がありましたら」

アレン・きこりん「」お待ちしております…！」「」

きこりん（なんかそれとなくぐさっときたが…？）

【第二話】不安な呼び出し〜神田ユウ・ラビ〜(前書き)

第二話は神田視点で、お呼び出しのシーンです

ちなみに作者はDグレもバカテスも

原作が手元にありません(殴

そんな中で進めているので原作丸無視や捏造どころの話じゃなくなりそうです……

…受験終わったら揃えようかな

【第二話】不安な呼び出し／神田ユウ・ラビィ

いつものように教団の敷地内にある森で六幻をふっていた神田ユウのゴーレムに通信が入った。

『神田くん、都合がいい時でいいから僕のとこまで来てくれるかな？』

「何の用だ？」

キツとゴーレムを睨み付け、声の主であるコムイに問う。

任務ならば任務だと、コムイは言うはずだ。

任務以外の事で鍛練を遮られた恨みのようなものが、神田の、ゴーレムの向こうにいるであろうコムイを睨み付けるまなざしに含まれていた。

『来てくれるから話すよ』

それだけ言うと、一方的に通信は切られた

しばらくそのまま、神田の目の高さにいるゴーレムを睨み付けていたが、通信のせいで集中力が切れたのだろう。

ちっ、と舌打ちをしてから六幻を鞘におさめた神田は高く結いあげてある彼の長い髪をなびかせて教団の建物の中へ入っていった。

「お、ユウもコムイに呼ばれたんさ？」

神田が教団の廊下を室長室に向かって歩いていると、ふいに背後から声をかけられた。

「俺のファーストネームを口にするんじゃないやねえ」

ギツと神田が睨みつけた先にいたのは、赤毛で、右目に眼帯をしているラビだった。

「おお、こわ。」と、肩をすくめてさらりと神田の視線を受け流したラビは言葉を続ける。

「ところで、なんで呼ばれたか聞いてるさ？」

「知らん」

「やっぱりかー」

頭の後ろで手を組み、先に歩き出した神田の横を歩くラビ。
神田もあきらめたようにそのままラビと共に室長室に向かった。

【第二話】不安な呼び出し／神田ユウ・ラビ（後書き）

きこりん「第二話です〜なんとか書きました」

ラビ「でもまだ俺ら教団にいるんさね？」

きこりん「…いましばらくお待ちください」

神田「おい、テメエ勉強はどうした」

きこりん「ギクツ…だ、第一関門（の試験）はとりあえず終わっ
たんだよ？」

ラビ「でも次の試験まであと20日さ」

きこりん「うう…ゴメンナサイ」

神田「まったく、我慢を知らねえのか？」

きこりん「お預けというものが苦手なのです…ほんとに」

ラビ・神田「…はあ…」

きこりん「そんな二人してため息つかなくてもお…ただ、今頭の中
にある話は出し切りしたいんだよお」

神田「あきらま無理です（きこりん）」

ラビ「早っ!？」

きこりん「…こんなきこりんですが質問、意見などありましたら喜
んで受け付けますので」

ラビ・神田「…これからもバカとエクソシストと召喚獣イノセンスをよろしく

「さ」「頼む」

きこりん「あ、長いから『バカエク』でも…いっ!?!?神田さん、
そんなに睨まないでください（泣）」

ラビ「響きがちょっとなあ…」

【第三話】不安な呼び出し〜リナリー・リー〜（前書き）

実は…っていう暴露話は後書きにしまして…

今回はリナリー視点で、コムイさんに呼び出されます

【第三話】不安な呼び出し〜リナリー・リー〜

陽射しのまぶしい夏のある日

任務から帰ったショートヘアの美少女リナリー・リーは、教団の室長でもある彼女の兄のもとへ向かっていた。もちろん任務の報告のために。

「ただいま、兄さん」

「おつかえり〜。リナリー、怪我はなかったかい??」

室長室の扉をあけると、両手を広げた兄、コムイ・リーが満面の笑みで出迎えてくれた。

その兄と言うのもシスコンの中のシスコン。この文章の中で表現しきれないのが申し訳ない。

「大丈夫よ」と微笑みかけ任務の報告をする。今回はイノセンスは無い、いわゆる『ハズレ』の任務だったが。

リナリーが一通り報告を終えると、コムイは「そうだ!」と何かを思い出したようにリナリーを見つめていた瞳をいつそう輝かせる。

「この後また話があるから、ここに来てくれるかな?」

…兄さんはちゃんと報告を聞いていたのかしら。

キラキラと自分を見つめている兄の様子に、そんな一抹の不安を覚えながら「分かったわ」とリナリーは部屋を後にした。

任務の汗を流し終え再び室長室へ向かうと、兄の姿が見えない代わりに
ソファーにはすでにラビと神田が座っていた。

「あら、二人とも兄さんに呼ばれたの？」

「ああ。まったくあいつは自分から呼んどいてどこほつつき歩いてんだ」

「きつと、またリーバー班長にでも追っかけられてるさ。リナリーは任務帰りさ？」

「ええ。さつき帰ってきたの」

不機嫌そうな声色の神田と、おかえり、とリナリーに笑顔で声をかけるラビ。

神田は相変わらず腕を組んで座ったまま、扉の前にいるリナリーに顔は向けない。だが、その背中はおかえりと言っているように見え、リナリーはただいま、と微笑む。

ラビがポンポンと自身の隣のスペースを示すので、それに従ってソ

ファーに腰を下ろすとそれとほぼ同時にまた、しかし遠慮がちに室長室の扉が開かれた。

「失礼します…ってあれ、コムイさんは？」

ひよこつと顔をのぞかせたのは、白髪の少年、アレン・ウォーカーだった。

まだ来てないさ、というラビの横で、「ちっ、モヤシもか…」とつぶやく神田の声をアレンが聞き逃すはずもなく

「なんだ、神田もでしたか」

と、今にも（恒例の）小競り合いが始まるうとしていた。だがそれは待ち人の登場によって幸運にも（？）遮られる

「みんなお待ちせう。さあさあ、アレン君も座って」

ヨッシーのマグカップを持って笑顔で現れたコムイ。

しかしその後ろで書類を持たされて（おそらくコムイのわがままに付き合わされたであろう）疲れた面持ちのリーダー班長を、そこにいた（コムイ以外の）全員が気の毒に思ったのは言うまでもない。

【第三話】不安な呼び出し〜リナリー・リー〜（後書き）

リナリー「やっと登場出来たわ。ねえ、前置きの部分長くない？」
きこりん「そうなんですよ。本来ならすぐにもバカテスの世界に飛ばすべき

なのですが…どーしてもDグレの世界が広がってきて
リナリー「で、短いながらもキャラごとに話を分けちゃったと」

きこりん「お察しの通りで…でもやっとなみな揃いました！」

神田「おい、前書きで述べた『実は…』って何だ？」

きこりん「そうだった（…；）それなんですがね」

ラビ「リナリーをメンバーに入れるか迷ったって話さ？」

きこりん・リナリー「…!!?!?どこからその話を」ねえ、それって本当なの？」

アレン「二人とも台詞がかぶってますよ」

ラビ「コムイから『僕のリナリーをメンバーに入れたいなんてひどいっ』」

って愚痴られたさ（苦笑）

きこりん「それ言われたんですよ、うちの中にいるコムイさんに…」

アレン「そういえばここ、もはやネタばれしてませんか？」

きこりん「…あらすじでばらしてる部分だから（まだ）大丈夫！^

^..」

リナリー「こんなおおざっぱな作者だけど、質問意見は喜んで対応するらしいわ」

ティーンズ「…」「バカとエクソシストと召喚獣イソセンスをよろしく」ね
さ「頼む」

きこりん（私の中でのティーンズって…?）

【第四話】 コムイの計らい（前書き）

やっ と だ ！

とつとつ呼び出しの正体が分かります。長らくお待ちいたしました（
た）と言っても同日UPだけど…（

そして今回も暴露（？）裏話を…

【第四話】コムイの計らい

「君たち、学校に行ってみないかい？」

ここにこと上機嫌のコムイが椅子に座るなり言った言葉は、エクソシストとして日々AKUMAと戦っている彼らにとって、一瞬だが、理解しがたいものだった。

「学校、ですか？」

沈黙を破ったのはアレンだった。それに続いてラビやリナリーも疑問を飛ばす。

「コムイ、いきなりどうしたんさ？」

「そうよ。それに私たちにそんな暇は無いんじゃない？」

神田に至っては腕を組んだまま「何を企んでやがる」と言わんばかりに、コムイを睨みつけていた。

そんな彼らにコムイは言葉を付け加える。

「もちろん任務がある時は任務に行ってもらおうよ。けどみんな、学校に興味はない？」

全員がうつ…と言葉に詰まる。

エクソシストとして幼いころから教団にいた神田、リナリーに加え、ブックマンJr.として各地をまわってきたラビ、それに実の親に捨てられてから、養父と無鉄砲な元帥により育てられたアレン。彼らは皆、学校と言うところに行つたことはなかった。

エクソシストとして、AKUMAを救済するために今までを生きてきたと言つても過言ではない彼らだからこそ、学校と言う平和に思える世界に興味はあつたのだ。

「僕はそんなみんなに、学校と言うところを経験してほしかつたんだ」

もちろんいい意味でね。と、それぞれの心を見透かしたように、コムイはやさしく言う。

「それに、丁度良い学校を見つけたんだ。リーバー君、みんなに資料を渡してくれるかな」

そこでやっと、ずっと立っていたリーバー班長がはつとしたように動く。

…もしかして立つたまま寝てたのか？なんて疑問はとりあえず置いておくとして、全員が渡された資料に目を通す。

「ふみづき学園？」

「日本か？」

ローマ字でふられた読み仮名に、神田が反応する

「そう。と言ってもそこは並行世界パラレルワールドの日本なんだ。そしてその学校は、他とちよつと変わってる。そこが君たちに丁度良いんだけどね」

「どう変わってるの？」とリナリーが聞くと、「よくぞ聞いてくれました！」とコムイが立ち上がる。

コムイの話によると、その学校では個々人のテストの点数によって
試召戦争というものが行われているらしい。結局戦うのか、と一同
はこっそりため息をつく。しかし戦うのは本人ではなく、召喚獣
という自分の分身だという話だ。

「でもちよつと待ってください。ラビはまだしも、僕たち勉強す
らしたことはないですよ？」

「だから学校に行くんだよ」

あっけらかんと言つてのけるコムイに、それもそうかとつなずく四
人。

「とりあえず向工の学園長に話はつけてあるから。はい、これ」

そう言って渡されたのは男子は青、女子は赤を基調とした文月学園の制服だった。

【第四話】 コムイの計らい（後書き）

きこりん「ふー、やっと教団を出ますよ」

アレン「まさにgggdと進んで行きますね。読んでくださった方、お疲れ様です」

きこりん「そして書いていて気付いたことがあるので、

リナリーの時の話をちよいと手直ししてきます」

神田「ちよつと待て」（ガシッ）

きこりん「はい？」

リナリー「前書きに書いた暴露裏話がまだよ？」

きこりん「ああ！」

ティーンズ（）（忘れてたのか）（）

きこりん「それなんですがね、時系列について悩んでたんですよ。

出来ればDグレの設定をずらしたくないけど、アレンのイノセンスを

クラウン・クラウンにするとリンクをどうするか迷うし

…」

ラビ「で、結局のところ？」

きこりん「方舟を出さないとバカテスの世界に行けないので、

リナリーの髪形を直してきますっ」

アレン「…走って行っちゃいましたね」

ラビ「あれ、書置きがあるさ…」リンクを出すかはおいおい考えます」

リナリー「相変わらずおおざっぱね」

神田「はあ…本当に進むのかこの話」

…頑張つて進めます。ここからはのんびりになると思いますが。

意見質問ありましたら喜んで受け付けますので、これからもよろし

く
お
願
い
し
ま
す
！

【第五話】転校生（前書き）

とつとつバカテスの世界に入ります！

【第五話】転校生

ある晴れた夏の日の朝の事

文月学園二年Fクラスに、ある一報が届いた

「…転校生がこのクラスに入るといいう情報を得た」

ムツツリーニこと土屋康太はスタタタ、と小走りに教室に入るや否や、そこにいた観察処分者である吉井明久とクラス代表の坂本雄二に耳打ちした。

「この中途半端な時期に転校生だと？」

雄二の言葉に、冷房のない教室でうだうだしていたFクラス全員が敏感にも、その場で耳をそばだてる。

「どんな人かわかる、ムツツリーニ？」

「男が三人…」

男かよ。なーんだ。という空気が教室に広がる。だが次の「…と美女が一人」という言葉で、そこは一気に色めき立った。

「なんだかわくわくしますね」

「どんなところかしら」

ここでしばらく待つように、と通された部屋に四人はいた。たくさんの机や椅子そして数えきれない量の本が並ぶ様子からして、そこは図書室なのだろう。木漏れ日が差し込みむせかえるような紙の匂いに、それぞれがブックマンの部屋や室長室を思い出しながらそわそわと呼ばれるのを待っていた。

コムイの勧める、と言うところに不安はあつたものの、いざ学校に足を踏み入れるとやはり期待や興奮があるもの。それは言葉に出したアレンやリナリーに限った事ではなかった。

「しつつかし、編入早々試験を受けさせられるとは思わなかったさ」

少し離れたところで本をめくっていたラビが苦笑いで言う。彼らは先程まで、召喚獣の強さのもととなる点数を確保するためにテストを受けていた。もちろんそれまでテストというものを受けたことが無い彼らにとって、それも貴重な体験の一つとなつたのだが。

「そうですね。数学や英語は何とか分かつたんですが、国語はちょっと…」

「神田なら読めたんじゃない？」

「いや、俺も日本語を学んだことはない」

日本の学校であるため問題もほぼ日本語。それが彼らにとって少なからず壁となっていたようだ。

すると突然、図書室の扉が開かれた。そこに立っていたのは、先程

の試験で監督をしていた西村宗一という、いかにも体育会系な体つき
の先生だった。

「編入早々の試験、ご苦労だった。これから教室へ案内するからつ
いてこい」

そして四人はFクラス^{最下位クラス}へ、編入した。

その頃どこから漏れたのか、あらゆるクラスの男子生徒が授業中にも
関わらず、しきりに廊下を気にしていた。むろん、『美少女』を見る
ためである。その様子を呆れたまなざしで見っていた女子生徒だ
ったが転校生が通りかかると、そのまなざしを好奇の色に輝かせた。

「…なんだか随分見られてませんか？」

「そりゃ、どう見ても日本人の顔つきじゃないからなあ」

珍しいんさ、とあくまで軽く受け流しながらも目の合った女子に手
を振るラビ。その様子に頬を染めた生徒の数知れず。神田は馬鹿ら
しいとため息をつき、さっさと歩いて行ってしまふ。

物陰からそれをカメラに収めている人がいるなんて誰も気づかなか
った。

「……最新情報」

ムツツリーニが息を切らすことなく、しかしすばやく教室に入ってくる。教師不在のため自習となっていたFクラスは、ムツツリーニの言葉の続きを聞こうと一瞬にして静まり返る。

「一人は日本人、美少女はアジア系……おそらく中国人、他の二人は良く分からないが西洋系の顔立ちだった。」

そう言つて先程撮ってきた写真をピツと目の前に掲げる……随分とローアングルのものが多い

「……一枚500円」

教室の隅で男だけの、静かながらも熱い競^せりが始まった。

「さすがムツツリーニ、情報が早いな」

「ドイツ出身はいるかしら」

雄二がその輪から離れたところで感心していると、ドイツからの帰国子女である島田美波が尋ねてくる。彼女もまた、日本語が読めずに試験で苦労していた一人である。

そこに、立てつけの悪い扉が音を立てて開いたかと思うと、鉄人ごと西村先生が噂の転校生をつれて教室へと入ってきた。

【第五話】転校生（後書き）

きこりん「いつもより長めでお送りしました！そして場面展開の多
さ、

読みづらくて申し訳ありません<>」

雄二「とうとう俺らも登場だな。まだ転校生とやらに会ってはいな
いが」

きこりん「それは次回のお楽しみで」

…ここで参考までに。エクソシストはDグレでは英語で会話してい
る、という設定ですがここでは物語の都合上、バカテスキャラとも
日本語で会話が成立しています。理由づけは何か考えますが、無
理やり感あふれる後付けになると思うのでご了承下さい>」
「<

それでは、意見質問ありましたら喜んで受け付けますので
これからもよろしく願います！

【第七話】自己紹介（前書き）

どんなタイトルよ^^^；

むしろそのままかな、内容が…。

さてさて、バカテスマンバーとDグレメンバーの初対面です！

【第七話】自己紹介

いかにも立てつけの悪そうな扉を（こじ）開けた先に四人が見たものは、はがれかけた畳の上に綿の抜けた座布団、そして使い古された段ボール。

（なあ、学校ってこういうところなんさ？）

（…さあ）

思わず互いに目で語る。そんな自分たちを好奇の目で見つめてくる同じ制服を着ている生徒たちは皆、正座やあぐらなどと自由きままに座っているようだった。それでもやはり、教室の様子に目が行ってしまふ。綿ぼこりの舞いそうな教室の隅、短くなつたチョーク、薄暗い蛍光灯。

笑顔、笑顔などと思うがたちまち顔が引きつるのが分かった。

「こんな時期だが、転校生を紹介する。日本に不慣れなようだから皆、仲良くするように」

西村先生が声を張り上げると、窓ガラスが微かに共振するのが分かった。ここどこが丁度いいんだ、なんて心の中でコムイに不満を言ってみても始まらない。せつかく学校に通えたのだから…とそれが意を決したように軽く、深呼吸した。

「初めまして、アレン・ウォーカーです。よろしくお願いします」

「ハジメマシテ、ラビっす」

「リナリー・リーです。よろしくね」

「…神田だ」

任務などで世界を渡り歩いてきた彼らにとって、自己紹介などの初対面でのスキンシップは朝飯前（無愛想を貫き通す神田を除く）。それぞれが笑顔で名前を述べ終わると、一番後ろの席に座るように指示される。

キーン、コーン…

と、そこで授業終了の鐘が鳴り響いた。「きりーっ、礼」と赤い髪を上にあげた男子生徒が気の抜けたような声で号令をかける。西村先生はそれぞれの肩を軽くたたき「次は授業でな」と教室を去って行った。それとなく緊張がとれ四人はため息をつきかけてあたりの様子に再び身を強張らせる。気づくとFクラスの生徒に囲まれていた。

「どこ出身？」「その傷、どうしたの」「その眼帯かっこいいね！」

「今までどこにいたの？」「リナリーさん、彼氏はいますか!？」

「神田ってホントに男？」

それぞれが一度にでんでんばらばらな質問を投げかけてくる。職業上、何とか聞き取れたラビが不穏な気配を察して神田を見やると、最後の質問だけは聞こえたのか青筋を立てて怒りを露わにしていた。

「みんな落ち着くさ！順番に答えるから、それでいい？」

ラビが神田がキレる前に何とかまとめると、Fクラス一同はうなず

いた。何気に統率力は良いのか、なんて思わず感心してしまう。「その前に」と、アレンが口をはさんだ。

「皆さんの自己紹介がまだなので、うかがっても良いですか？」

初めに名乗ったのはクラス代表、坂本雄二。先程号令をかけていた生徒だ。そして次に名乗った吉井明久は、アレンの傷に随分と興味を示していた。

「どうしたの、その傷？」と目を輝かせて聞く明久に、「呪い、です」と手袋をはめた左手でペンタクルペンタクルに触れながらアレンは少しさみしそうに答える。

「あ、ごめん…」

「いえ、気にしないでください」

そういえばこのクラスには僕の傷を白い目で見る人はいなかったな、とアレンは思う。距離を置かれなかったようで少し、嬉しかった。次に名乗ったのは木下秀吉。名前からして男なのだが、どうやら女の子として間違われやすいらしい。「そういえば」とラビが思い出したように言う。

「随分と豪華なクラスに、髪型違ったけどおんなじ顔の女の子いたさ」

「わたしの双子の姉じゃ。Aクラスにおるでの」

なるほど、女子と間違えられるわけだ。姉との違いはヘアピンの位

置らしい。次は、土屋宏太。寡黙なため明久が付け加えたところによると、ムツツリー二と呼ばれているらしい。だがその由来まではまだ分からなかった。そして、数少ない女子は姫路瑞希と島田美波。瑞希は腰のあたりまでのふわふわとした髪にうさぎのピン止めをとめてかわいらしい、という言葉のよく似合う女子だ。一方で美波は黄色いリボンで高めにポニーテールにしており、瑞希とは対照的に活発な印象を持った。

キーン、コーン…

と、ここで他多数の自己紹介を残し次の授業の予鈴が鳴った。雄二によると次は体育らしい。

「リナリーちゃん、女子更衣室まで案内します」

「ありがとう、姫路さん」

「じゃ、ウチらは先行ってるから男子も早く来なさいよ」

そう言っつて、わいわいと三人は教室を出て行った。

もちろん残されたのは男子ばかり。いきなり華のなくなった教室は、初めよりもなんだか味気なく思える。

「さーで、俺らも着替えるか」と、伸びをしながら雄二が全員に声をかけた。

【第七話】自己紹介（後書き）

雄二「おいおい、自己紹介で一ページかよ」

明久「僕ほとんどしゃべってないよ」

きこりん「申し訳ないです…おおざっぱに書けないという性格が

まざまざと出てしまった…」

質問、意見ありましたら喜んで受け付けますので。

これからも『バカエク』をよろしく願います。> | <

きこりん（もう、この通り名で浸透させようかな…）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7649z/>

バカとエクソシストと召喚獣《イノセンス》

2011年12月28日00時48分発行